

## 活動レポート

### オカリナ コンサート

須磨区会は6月6日午後から一の谷プラザ（須磨区）でオカリナコンサートを開催。約30人の参加者は、やわらかな音色に乗って



流れる「浜千鳥」「ローレライ」「歌劇・魔笛より」など約20曲を楽しみ、最後は「ふるさと」を全員で歌って散会しました。出演は〈青いカナリア〉（11人）、〈鳶鳥クラブ〉（18人）、〈スタンドグラス〉（音文10期）の3グループ。垂水区会からも10人あまりが駆けつけ、「親しみやすい曲ばかりで、くつろいで聴けた。とてもよかった」と話していま

した。細野恵久区会長も「初めての試みだったが、まずまず」と、ほっとした様子でした。（須磨区会）

### ゲストティーチャーに期待

24年度最初の「学習支援者の集い」が4月13日、50人が参加してカレッジ学習室で開かれました。加藤勇治委員長が「現在の登録者は107人。実働は64人なので70人に伸ばし、支援校を49校からさらに増やしたい」と年度目標をかかげ、登録者に協力要請がありました。続いて、市教委の丸山明夫氏と有原暢彦氏が講演。「昨年からのゆとり教育がなくなり、教科書も分厚くなった。教えることも増え、〈わ〉の皆さんのようなゲストティーチャーに期待する部分が多くなった」と映像を交えて学校現場の状況を説明。神戸っ子応援団についても「〈わ〉の活動は今までどおり続けてほしい」と要望がありました。

質疑では特別支援への疑問・要望が多く出されました。（学習支援委員会）

## ミャンマーで梅酒づくり

北山秀俊（国際9・須磨区会）

寄稿

ミャンマー政府は経済重視政策を矢継ぎ早に進め、政治犯の大部分を解放。各国の経済制裁も一部解除が続く。4月の補欠選挙では45議席中スーチー氏率いる政党・民主連盟（NLD）が43議席獲得した。これらの変化で、私たちミャンマー皆好会（かいこうかい）への問い合わせも多くなり、活動も広がりつつある。

2001年、ある会合で中尾作蔵氏（故人）から「北山君ミャンマーに行けへんか」と声をかけられた。

「実はなあ、ワシはビルマ戦線に従軍してたんや。敗色濃い中、飲まず喰わずで英印軍に追われ多くの兵士が戦病餓死した。そんな中でも、ビルマ人に助けられた兵士の多くが復員できた。その恩返しに、梅の苗木を植えに行くんや、一緒に行ってくれへんか」「はあ、行かしてもらいます…」。

同年12月にゴルフバッグに苗木150本を詰めて26人がミャンマーを訪問。高地ピンウールィンで現地農民の皆さんと植林をした。

この植林には苦勞話がある。中尾さんはすでに練乳工場を支援しており、今度は梅林をというわけだったが、南部の専門家の見立てでは、南高梅では気候が合わないという。そこでピンウールィンと同じ緯度にある台湾の二星梅（アールシンメイ）を選び南部で苗木に育てて持参した。06年に16kgを初収穫、07年165kgと収量も増えていった。



次は採れた梅をどうするか。農民たちに梅酒づくりと梅干にする方法を指導した。シャン州の米糠酎（36度）に干した梅を漬

け込むが、氷砂糖・一般黒糖・椰子黒糖の3種を試作した。08年には私も訪問して1年物の梅酒を試飲した。ストレートでは強いのでミネラルウォーターで割っていただいた。現地の人たちは、椰子黒糖が一番美味しいという。ミャンマー人は普段は安いラム酒を飲むので、梅酒も手頃な値段で提供され、広まればいいなと願う。梅酒と梅干はミャンマーとタイの日本人社会で販売されている。梅干も好評だがミャンマー人の食卓に上るまでにはなっていない。

植林から10年経ち今では約4トンの実を収穫できるまでになった。梅の木を増やす「取り木」の技術指導もしているが、まだ自立には程遠い。課題はいくつもあるが、農民支援は着実に成果をあげている。

2002年に皆好会が結成され、2005年にはNPO法人の認証を得て活動の分野が格段に広がり、会員・賛助会員も87人となった。これを機に、2005年からはイラワジ川河口でマングローブの植林にも取り組んでいる。=写真は大きく育った梅林の前に立つ北山さん